

障がいのある子どもたちに寄り添って

千葉留里子

はじめに

昨年、相模原市の障がい者施設で、元職員が施設で生活する十九名の命を奪うという前代未聞の事件が起こりました。大変衝撃的で、関係者はもとより、障がいのある方の家族にとっては、より心に突き刺さる事件だったと思います。犯人はこう語っています。「障がい者は不幸しか作れない。いない方がいい」「意思疎通のできない重度重複障がい者に安楽死を認めるべきだ」と。犯人は障がいを持った方の人権を認めていません。障がい者も家族も不幸であるというのは偏見としかいいようがありません。

私は、長年、特別支援学校の教員として勤務してきました。障がいを持った子どもたちが生き生きと勉強する姿、生活する姿を見てきて、そこから、人間の持つすばらしい力を感じてきたのです。

一方で、彼らを取り巻く環境の厳しさについても考えるところがあります。周囲の理解が進むことで、より生きや

すい環境にできるのではないかと思えます。

これまで、私が携わってきた子どもとの関わりを書くことで、読者の皆様が障がいを持った方とともに生きるためどうあればよいかを考える一助となれば幸いです。

かけがえのない宝物を持つ子どもたち

春になると、思い出す光景があります。高等部の副担任をしていたとき、クラスの生徒たちと校舎の周りを散歩したことがあります。しばらくして、Tさんが不自然な歩き方をしていることに気づきました。フラフラと蛇行して歩いているのです。(足でも痛いのかな?)と見ていて、私はハッとしました。Tさんと目が合ったとき、彼女は恥ずかしそうに言いました。

「先生。私、タンポポを踏まないように歩いているの」

そのとき、私は、Tさんの持つ純粹さと優しさを感じ、胸が熱くなりました。他の生徒たちもTさんの言葉を聞く